

『これからの「正義」の話をしよう
—いまを生き延びるための哲学—』

マイケル・サンデル著・鬼澤忍（訳）

食料・環境領域主任研究官 高橋 克也

東日本大震災は、これまでの生活の営みを奪い、あたり前に享受してきたエネルギーやテクノロジーといったものをいとも簡単に瓦解させた。同時に、直接地震や津波の影響がなかった者の生活さえも不安と恐怖に陥れ、日本全体が未体験の領域に足を踏み入れようとしている。まさに我々は今、この崩壊の現場を目の当たりにしており、この先にどのような未来があるのか全く見当もつかない状況となっている。しかし、そこに人間の営みがある以上、これまでの生活基盤のあり方といったものを根本から見直し、国をあげて新しい秩序を模索しなくてはならない。

マイケル・サンデルが本書（原題：JUSTICE *What's the Right Thing to Do?*）で提示した正義をめぐる視点とは、日本にとって大きな喪失を経た今だからこそ、新たな社会的枠組みを構築するひとつの考え方を提示している。本書は、ハーバード大学で行った講義を基に、具体的な事例を通して「公正とは何か」「平等とは何か」「正義とは何か」といった諸点を我々に問いかけている。すなわち、これらの問いとは「善い社会とはどのような社会か？」という課題に向き合っているのである。

サンデルは、正義をめぐるベンサム功利主義やカントの道徳論、あるいはロールズの正義論など様々な考え方を解説・議論しながら、自身の主張を明確に述べている。サンデルは、個人は社会に埋め込まれた存在であり、これまでの政治社会における正義と権利をめぐる公的議論において、個人的道徳と宗教的信念といったものは、政治の中立性や客観性を阻むとして排除されていたとみている。しかし、本来、政治社会と道徳的人格は切り離されるべきではなく、多様な道徳的人格を公共の場に取り込むことこそが、正義の実現であるとしている。

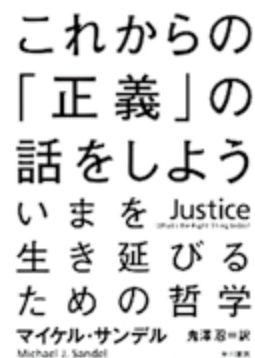
ここでこれまでの日本の現状を取りあげるなら、人口減少による地方の疲弊、児童虐待、無縁社会、若者の就職難、格差の拡大等、挙げはじめたらきりがなく、すぐには解決の糸口さえ見つかからない問題ばかりである。しかし、それらに対して政治が取り組む用意はない。各問題が社会化したのは、これらが個人的問題（＝道徳的人格の問題）として帰せら

れてしまったことによる爆発的事象であるとも考えられる。

こういった問題に対し、リバタリアニズム（自由至上主義）やリベラリズムといった考

え方は有効な解決策を導けるだろうか。筆者の考えは否である。なぜなら、地方の疲弊は、地域の市民や商店の自助努力のみでは、人口減少を食い止め活性化させるには到底及ばないほど深刻であって、児童虐待や若者の就職難を当事者の個人的資質の問題とするには、社会に与える影響があまりにも巨大になり過ぎてしまったからである。そんな時に登場したサンデルの政治哲学とは、それらを個人的問題とせず「公共的問題として声をあげよう」と呼びかけ、個人でも政治でも解決できない、いわば行き場のない「悩み」に対し、ひとつの考え方を提供している。その意味で、本書が我が国でベストセラーになった背景とは、これら諸問題がこれまで個人的問題として処理・矮小化されていたことに対する大きな疑問であって、これらを社会全体で共有するといった「善き社会」を志向する潜在的な方策を求めていたからではなかったか。

翻って、戦後最悪の災害を被った今の日本である。ちょうど我々が自由至上主義の限界に気づき、これまでの社会全体のあり方を見直す時期に差し掛かっていた矢先のことであった。サンデルの政治哲学をここで応用するならば、それまで結びつけられていた家族や街や土地を奪われた人間の悲しみといったものを、道徳的感情を公的言説へと押し上げながら秩序を形成することによって、我々自身の「共通善」を政治社会に反映させることではないか。今後、復興に向けた動きの中では、サンデルの学生に提示した具体的事例のように、正義をめぐる衝突が様々な形で噴出するだろう。しかしながら、今まさに、全国各地の自発的な発意から湧き出た支援の動きそのものが、政治社会における個々人の市民的人格を形成し、善き社会への一歩となることを確信している。

『これからの「正義」の話をしよう
—いまを生き延びるための哲学—』

著者／マイケル・サンデル
訳者／鬼澤忍
出版年月／2010年5月
発行所／早川書房